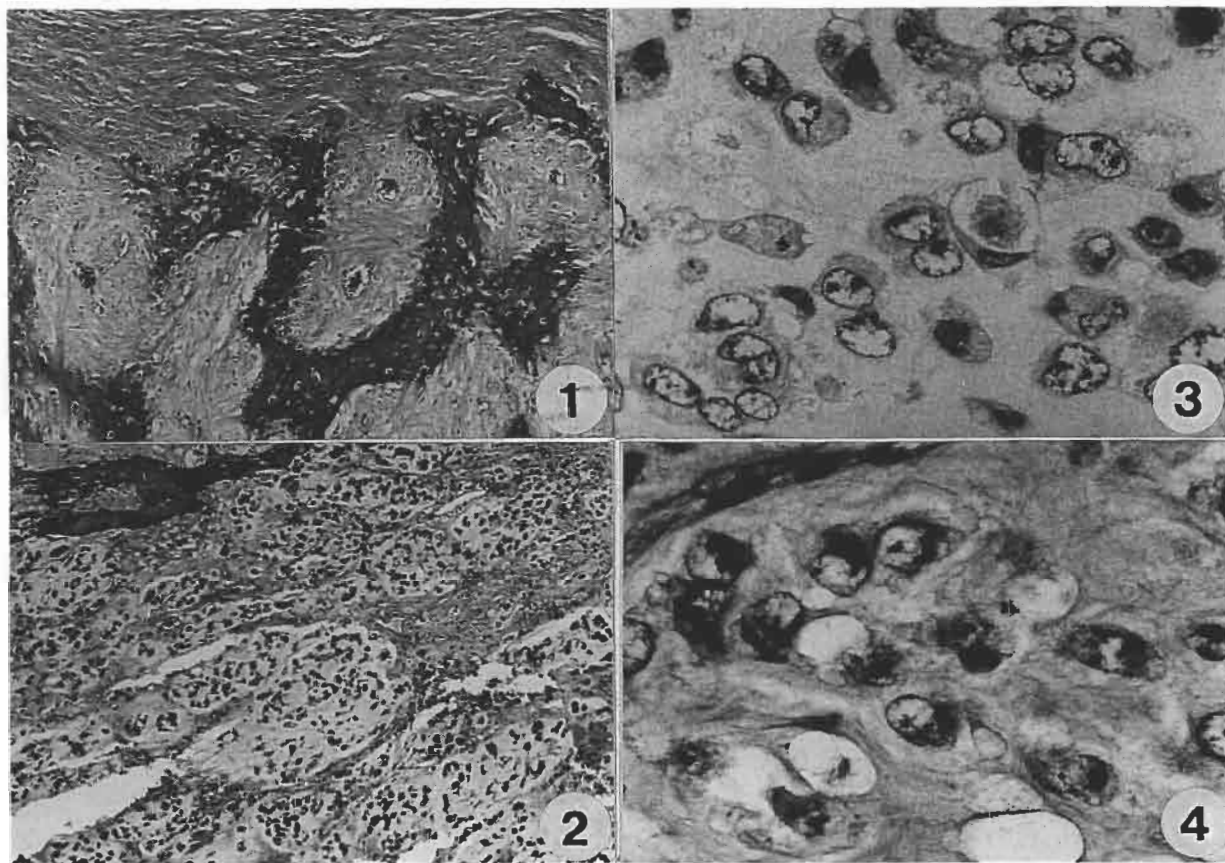


牛の咽頭部腫瘤

大阪府立大学農学部獣医病理学教室出題 第32回獣医病理学研修会提出標本No.570



動物：牛，ホルスタイン種，雌，5歳。

臨床的事項：1991年4月26日，数日前からの持続的な両側性鼻出血のためU家畜医院に上診された。止血剤，抗生物質などの投与で出血量は減少したが，その後も少量の鼻出血が持続した。5月中頃から咽喉頭部の腫脹，汚赤褐色鼻漏，鼻腔狭窄音（吸気時>呼気時）を示し，同年6月14日，呼吸困難の症状を呈して死亡した。

肉眼的所見：咽頭背側から腔内に突出したソフトボール大の出血の著しい硬い腫瘤を形成していた。この腫瘤は左右鼻道の間中部まで連続した拡がりを示し，鼻腔及び咽頭腔を高度に閉塞していた。咽頭鼻部では腫瘤は上顎骨を侵食し，被膜を伴って周囲組織へ膨隆していた。咽頭部の腫瘤剖面では周辺部は刀で切断可能な硬さの線維性骨組織から成り（標本A），中心部は骨組織が乏しく出血のため黒赤色を呈した線維性組織中に光沢のある灰白色の密実な組織がみられた（標本B）。その他，高度の間質性肺気腫，うっ血肝などが認められた。

病理組織学的所見：腫瘤の周辺は厚い結合組織で被われ，これに続いて海綿状の不規則な骨梁が増生していた。これらの境界では骨芽細胞がみられ骨膜

組織に類似していた（写真1，HE染色，×63）。骨梁は層板構造を示さず線維性骨から成り，周縁にはときに骨芽細胞や破骨細胞が認められた。骨梁間は少数の線維細胞，膠原線維，硝子様物質で満たされ，拡張した血管もみられた（反応性骨形成）。一方，腫瘤の中心部は粘液産生に富む未分化な細胞が腫瘍性に増殖し，一部では線維性組織で区画された分葉状構造や上述の線維性骨組織への浸潤像も認められた（写真2，HE染色，×63）。腫瘍性類骨及び骨形成は認められなかった。腫瘍細胞は類円形，短紡錘形あるいは不整形で細胞質には大小の空胞を有するものがあり，単在性あるいは集簇性に観察された。核は多形性が強く，クロマチンは粗で核分裂像も散見された（写真3，HE染色，×630）。細胞間にはpH2.5アルシアン青陽性の多量の酸性粘液基質が認められた（写真4，×630）。また腫瘍細胞は免疫染色でS-100蛋白及びビメンチンに陽性を示し，電顕的には核は不規則な分葉状で細胞周囲には電子密度の低い物質とコラーゲン細線維がみられる幼若な軟骨細胞類似の形態を示した。

病理組織学的診断：牛の反応性骨形成の著しい咽頭部軟骨肉腫。